

小学校教科単元での湿原を題材とした学習についての意見

教科学習の素材としての湿原の活用を図るにあたって、教員や教育委員会等から意見や配慮すべき事項、学校現場の状況等について情報収集を行った。

教科書の補足的な資料と考えるべき

- ・ 釧路湿原を題材としてとあるが、教科学習では単元での学習内容が主になるため、あくまでも素材の1つにしかならない。
- ・ 社会科の副読本のように、教科書の代わりとしての作成した資料を教育現場では使うことは難しい。あくまでも、学習指導要領を見据えつつも、教科書を基準にしていくことが必要。

教科単元の補足資料として期待したい

- ・ 湿原が隣接していても、児童にとっては危険なため、自然に触れ学ぶことが難しい状況もある。総合だけでなく、教科などの時間でも湿原の理解を助ける資料があると有用。
- ・ 小規模校においては学校や教員の裁量で取り組む余地がまだあるが、大規模校については新学習指導要領の施行等もあり、カリキュラムの調整、実践を補助する教員の確保等がますます難しくなっている。こうした点からも教科において素材として扱う試みは評価できる。
- ・ 副教材として教科、単元を意識して湿原に係る情報が整理され提供されることは現場としても有用。
- ・ 道徳については、指導は学校および教員の裁量になる。直接的に湿原を題材として扱うことが出来る教科として、道徳が考えられる。
- ・ 教科の素材としては、3、4年生の地域学習、5年の地理などが考えられる。例えば、湿原の経年変化の資料や湿原の広さを伝えられる資料（釧路町から見た湿原、鶴居村から見た湿原など）は使われるかもしれない。

授業では補足的な資料を使用することは頻繁にあり、単元に沿うものであれば使われる可能性も高くなる。

- ・ 教科書の内容にプラスの資料を授業に使用することは授業では頻繁にある。
- ・ 例えば、理科では児童に身近な環境から学習を進めて行く。学習に必要な情報が身近にない場合、教諭が資料を独自に収集して授業に活用することがある。こうした資料が身近（教員の目に触れやすいところ）にあれば使える。
- ・ 小学校では地域性を持った学習、中学校では一般化する学習となる。例えば、中学の社会では身近な題材だけではなく、課題解決型の学習を行うこととなるが、授業では教科書通り出来ないことも多い。湿原を素材に一般化できるテーマであれば、活用の可能性はある。

授業の中での活用イメージを伝えるべき

- ・授業の中で具体的にどのように活用できるのかイメージが伝わる資料が有用。
- ・45分間継続して教科書を使い続けて授業を行うのは難しいこともあり、教員は授業をいくつかの区分に分けて授業を組むことが多い。この1ブロックの素材として検討してみてもどうか。
- ・簡易な指導案（導入、展開、まとめ）と合わせて写真や資料等の情報提供が有用。
- ・内容にもよるが、単元で考えるのであれば、教科書の学習を終えた後に行う発展学習の副教材として捉え、1時間内で考えるのであれば、きっかけづくりとして授業の最初に使用する副教材として、活用を図ることが妥当。

学年に合わせた手段、内容で情報提供すべき

- ・教科書では一般的な学習を行うが、きっかけ作りとして資料集的に映像や資料があれば有用。多くの学校では各教室にテレビ等は設置されているため、映像も有用。
- ・学年によっても適した資料は異なる。小学校低学年、中学年では物語的な資料は比較的に利用しやすく、高学年では写真、データの的な内容も必要となってくる。

授業やテストを想定したフリー素材や教員用の補足資料、どこに行けばそれらの情報が得られるかといった情報提供も必要

- ・湿原のどこにいけばこういった素材があるのかという情報があると有用。自由に利用できる素材データとともに、実際にどこで得られる情報かがわかると授業で活用しやすい。
- ・一般的に教員は学んだことの評価はテストで行うこととなる。教科書外の情報を扱った場合、テストで活用する写真や資料なども教員が独自に収集しなくてはならなくなるため、テスト時に使える補助的な資料提供も検討することが必要。なお、全国共通テストなどでは、教科書で学んだ素材を使用しているため、同じ学習効果があるからと異なる素材で学習を行った場合、全国的なテストなどでは児童が対応出来ないという状況も起こりうることに注意が必要。

小学校3、4年生の社会科副読本との連携を図るべき

- ・3、4学年の社会では、教科書に代わって市町村単位で作成した副読本を使用している。地域密着の内容であるため、この副教材の補足資料として情報があれば有用。
- ・湿原に係る資料は、3、4学年で学習する郷土読本の資料に成りうる。副読本は定期的に改定しているため、作成に関わる教員等に継続して情報提供を続けることで副読本内に掲載されなくても、副読本に関係する参考資料として教員の目にとまれば使われる可能性が大きくなる。
- ・教員にとって必要感がなければ資料を活用することはない。教科書と連携して行うことが有用であり、社会科副読本の補足資料としての活用を図る等を検討するのが良い。

様々な時間での関連性を考慮すべき

- ・教科だけに限らず、文化祭や遠足、修学旅行などで接点を持ってもらう方法も考えられる。
- ・教科間の連携は学校としても重要なテーマであり、道徳や理科などで学んだことを6年国語の「討論会をしよう」、「調べたことをまとめよう」などで扱えると良い。

情報を届ける教員や学校をある程度絞るべき

- ・教科書を上回る学習は教員のプラスの技量や考えに基づき、それらを行うことで教育効果が上がるといふ教員の経験やきっかけが必要。それらの経験を有している教員に集中して情報を届ける等を検討しても良い。
- ・校区の近くに湿原（環境）があるところが、取り組みやすい。

課題

- ・釧路湿原を様々な視点から切り取り、教科の素材として使うことは考えとしては可能であろうが、逆に、釧路湿原が様々な情報、関係性を持っているだけに、どこまでの内容を学年や単元で扱うか区切りをつけることも非常に難しい。
- ・どんなに有用な情報をまとめたとしても、教員にどのように届けるかが最も重要になる。必要性がなければ、教員は資料を見ることはない。つまり、活用してもらうには、学習（主題）の素材として優れたものでなければ必要性が薄い。
- ・教員に活用の必要性が生じた際に、どこでそうした情報を得ることが出来るのか認知してもらおうことが重要。また、教員にとってそれらが必要な情報と捉えられる形で情報集積を行っておくことが重要。
- ・総合、教科で行ってきたことが結果として環境を大切にすることを育む。学習の題材はその年代、地域に適切なものを選択していくべきで、問題は何を題材とするかではなく、どのような経験をさせるか。題材として湿原が適する学校もあれば、そうでないところも多くある。
- ・授業で活用する場合、教員としては釧路湿原における自然再生事業の背景や現状などの資料は必要と考えられるが、教員の中で消化できない場合も多いのではないかと。自然再生事業に対する考え方などに迷いや矛盾点を抱く場合もある。
- ・教科書にプラスの学習が、児童の学力につながり、意欲や思考力も出てくるということをいかに客観的に出していけるかが、こうした学習の波及を考える上で非常に重要。